

## 我らの日用の糧を今日も与え給え

「主の祈り」は最初の呼びかけの言葉から始まって6つの祈願が続く。その第4の祈願から後半部に入る。後半部の第1の祈りは「私たちの必要な糧（口語訳では「日ごとの食物」）をきょうも与えてください」である。主はこの単純な祈りによって、最も深い信仰の真理を弟子たちに教えられた。

この祈りは“アッバ父よ”と、その日その日の必要な糧を神に求めることによって、神こそは命の賦与者であり、また生活に必要な全てのものの与え主であることを認めて、日々、この父なる神の恵みのご主権に信頼して生きるという、キリスト者の生き方をもっともよく表している祈りである。

この祈りを聞いたとき、弟子たちは、かつてイスラエルの民が荒れ野において、日々、天よりのマナをもって養われた出来事を思い起こしたに違いない（出エジプト記16：1～36）。イスラエルの民が荒れ野で40年の間放浪したとき、神は天よりのマナをもって、日々、彼らを養われた。彼らはその日その日に必要な分だけのマナを集めることが許された。必要以上に集めたり、貯えたりしたマナはくさってしまった。

こうして、イスラエルの民は荒涼たる荒野のただ中で、この不思議な出来事により、神こそ生と死の主権者であることを教えられ、日々、この神に信頼して生きるように訓練されたのである（申命記8：1～10）。

新約の民であるキリスト者も、「きょう」という一日を、主権者なる神に信頼して生きるよう求められている。ここで「日ごとの食物」（原文では“パン”）というとき、それは、ただ単に食物としてのパンだけではなく、私たちの生命を維持するために必要なその他の一切のものが意味されていると解することができる。神こそは命の主であり、すべての恵みの与え主であることを謙遜に認めて（ヤコブ1：17）、きょうという一日を神にゆだねて生きるのである。

この祈りは、豊かな時代に生きるキリスト者への警告の言葉でもあることをおぼえたい。金さえあれば何でも手に入る時代である。スーパー・マーケットには豊富な商品が並び、冷蔵庫には一週間分の食料がぎっしりとつめこまれ、銀行には将来を保証するだけの預金がある。もう大丈夫だ、とそう信じて私たちは豊かさの中で、自分が神によって生かされているという事実を忘れ、日々、神に信頼して生きることを忘れてしまう。

私たちは、ルカによる福音書第12章に記されているあの「愚かな金持ち」のように、この世の持ち物を誇り、この世の富があたかも自分の生命を保証しているかのように考え、命の賦与者である神に感謝することを忘れ、人生の主権者である神に信頼して生きることを忘れてはいまいか。そうあってはいけない、とこの祈りは私たちに警告しているように思える。

従ってこの祈りは、貧しい者が、日々の糧を神により頼んでいく、というだけでなく、富める者もまた、たとい、将来のためのパンを与えてくれる豊かな所有物に囲まれているにしても、それでさえも神のご意志なしには自分自身のものであり続けることができないことを認め、あたかも持っていないかのように、持ち物に信頼せず、日々、神のご主権とその恵みに謙遜に信頼して生きることを教えているのである。